

# 圓福寺報

圓福寺報 第六十三号  
 平成二十五年七月十五日発行  
 発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺  
 千葉市稲毛区六川町三七五 TEL (二五二) 九二八一  
<http://www.chiba-enpukuji.com>  
 E-mail: oshou@chiba-enpukuji.com

# 福

ふの受盡

紫野 雪窓

「福、受け尽くすべからず」

「福」  
不可受盡  
紫野 雪窓

## 目次

法話「放下著」  
ほろびじやく  
「――捨ててしまえ!」 2

二順目第十一回  
「四国あるき遍路の旅」 8

第十二回四国あるき遍路のご案内 13  
連載「続・寺から半里」 14  
園生町 熊倉 浩さん

第三十六回花園会ゴルフ大会 18

平成二十四年度花園会会計報告 18

寺の事件簿  
「薪小屋から転落!」 19  
尚美さんのお寺ライフ

「寺庭婦人研修会に行く!」 20

お寺と和尚の記録抄 22

六川花園幼稚園 園だよりから  
「十育つ」 23

地藏盆のご案内 24

ほうげじやく  
「放下著」  
二一捨ててしまえ!

■庭木の永代供養

圓福寺市原別院「耕雲寺」の敷地は、約一万坪あります。その広大な敷地に足を踏み入れると、真ん中に幅一〇メートルの舗装道路があり、左に原っぱ、右に畑。その畑の奥に、仮本堂として使っている四十坪のプレハブと、さらに奥に、立派なトイレがあります。

敷地に入っすぐ右手に、たくさんの庭木が仮り植えされています。どの庭木も、もとの持ち主がいまして、それぞれの自宅で大切に育てられていたものです。ご自分で手入れをされて

いたのに、寄る年波で面倒を見きれなくなつたからといって譲って下さつたものや、珍しい植木を庭に植えたものの、大きくなりすぎて手に負えなくなつたものや、主の亡くなられた庭の植木であつたりします。

そんな植木は、子どもの誕生の記念樹だつたり、ご自身が子どもの頃に故郷の庭にあつたのを懐かしんで植えたあんずや柿だつたり、お茶をたしなむ奥さんのために植えた木だつたり、それぞれにいろいろな思いが込められています。いろいろなご事情で庭を整理しなければならなかつたり、土地を手放すことになつたり・・・しかし、そ

の思いを  
残したい  
というお  
気持ちは  
なんとか  
してあげ  
たいと  
広さだけ  
には不自  
由しない  
市原別院  
でお引き  
受けした  
のでし



重機を使って  
つじの植え替えをする住職

た。いずれは、徐々に整備されていく境内の庭に植栽されて、それぞれの植木は、それに込められた思いとともに生きていつてもらえると思うのです。

植木たちは、お寺が続く限り、その命を育んでいけるので、これは庭木にとつての永代供養じゃないかと思つています。私たちのいのち同様、草木のいのちも大切にしたいものです。

## ■サツキの植え替え

「お寺の庭に植えてもらったから、お参りの人に見ていただけて、主人も喜ぶと思います。」

サツキの盆栽が趣味だったご主人を亡くされて、たくさんの立派なサツキをいただききました。ご自宅の周囲を取り囲んで、色とりどりのたくさんの種類のサツキは、どれも丹精込めたものでした。

「盆栽の面倒を見たことがないので、庭に露地植えさせていただきます。」とお許しをいただいで、トラックいっぱい



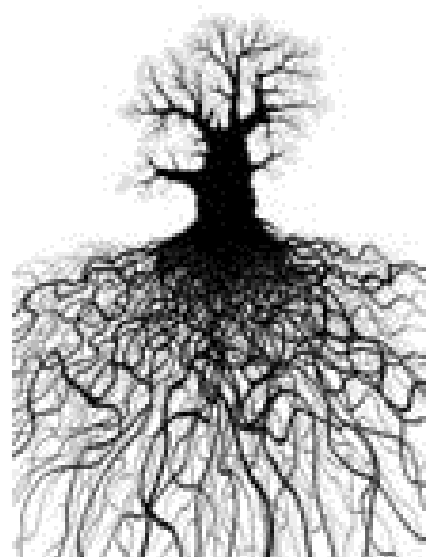
ツキを運んできて、庭に植え替えることにいたしました。

大切なサツキを枯らしてはいけないと思い、前もって、鉢植えのサツキを露地に植え替える方法を調べました。

サツキを植え替えるとき、同じような土の質なら問題ないのですが、土壌が変わるようなら、植えてあった土は全部落とさなければならぬのだそうです。

いただいてきた盆栽は、水はけのよい鹿沼土に植えられ、しっかりと根を張っていました。その土を落としていくのはかわいそうだと思いつつも、せめて根が傷まないようにと竹のへらで土を落とすとしていくのですが、容易な作業ではありませんでした。

鉢によって、ほぐしやすいものやそうでないものがあるのを不思議に思いつつも、その理由に気づきました。盆栽のサツキは、



何年かに一度の植え替えをしないと、根が締まって花の付きが悪くなるのだそうです。ですから、ほぐしやすい鉢は亡くなつたご主人がまだ元気だったころに植え替えたもので、固くてなかなか土をほぐせないものは、もう植え替える体力もなくなり、植え替えてやらなければと気にされていた鉢なのだろうと思われました。そう気づいたら、植木鉢一つ一つに、亡くなった方の思いが込められていて、その思いに触れながら土をほぐしているのだと、胸が熱くなりました。

ようやく土を落としたら、今

度は根を切り詰める、それも三分の一ぐらいまで、と植え替え方法に書いてありました。

水分や栄養を吸収するための根がせっかく伸びているのを切り詰めなければならぬのは、まさに断腸の思いです。植物は、根を張ってこそ元気に育つと思っている者にとっては、腑に落ちない作業です。それでも、植え替え方法を信じて、サツキのためと腹をくくってパチパチと根を切り詰めました。鉢に植えられた盆栽の時には、一人でもよく持ち上げられるほどの重さでしたが、根を切られたサツキは、盆栽の状態が嘘のように、片手で持ち上げられるほど、ダイエットに成功した姿になりました。

いよいよ、お寺の庭の新しい土に植えこみます。

深植えにならないほどの深さと、根の大きさに合わせた穴を掘り、サツキを置いて、根の周りにたっぷりの水と、水でどろ



どろにした土を入れてやります。このとき、根の周りに空気が残らないように、サツキをゆすってどろどろの土と根を密着させます。サツキがぐらぐらしないようになり、根の周りに土が行き渡ったら、根元の周囲に土で土手を作って、その中にまたたっぷりの水を注ぎます。

これで植え込みは終わりですが、その後、根元が乾かないように、毎日水やりをかかさないうようにしなければなりません。サツキをいただいてきたのは花が咲く前でしたので、植えた後、花を咲かせた後、花を咲かせるのには、かなりのエネルギーを使うと聞いていたので、花が終わったから枯れてしまったなんてならないように、できることは水やりしかありません。表面の土が乾かないように、池の水を汲んでは

せつせと水やりを続けました。おかげで、盆栽のときから少し元気がなかったサツキ以外は、新芽が芽吹いてきたので、無事植え替えができたのだらうと安心しています。来年も、色どりの見事な花を咲かせて、お寺に来る人に見てもらえるように祈っております。

## ■植え替えの大切さ

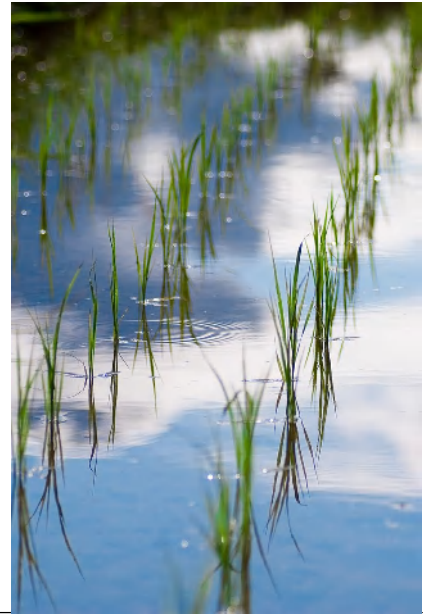
考えてみたら、サツキに限らず、鉢植えのものは植え替えが欠かせません。何年も植え替えずに育てると、根詰まりという症状をおこして、葉っぱが黄色くなったり生育が悪くなってしまうのです。

鉢植えだけでなく、農作物も植え替えられるものがあります。この場合は、根の成長を促し、根をしっかりと張らせるための植え替えです。

代表的なのは、お米です。苗代で苗を育てて、田植えという



植え替えをします。子どもの頃、田植えの前になると苗代の苗を、田んぼの水でぎぶぎぶと洗っていたのを、手伝いもせずに見ていたのを思い出します。今では、苗代を見ることはなくなり、田植えも機械であつという間に終わってしまします。それでも、苗代がなくなつたとはいえ、苗箱で育てた苗を田んぼに植え替えるのは変わりありません。



**■人も植え替え**

幼稚園に入園するのは、植物で言ったら植え替えですよと、お話しがありました。

入園までは、家庭という植木鉢の中で育ち、成長とともに運動量も増え、興味を持つことも多くなり、自分の身の回りのことができるようにになったら、大きな植木鉢が必要になるように、幼稚園や保育園という小さな社会に根を生やし始めます。

そこで二～三年の生育があつて、次は小学校というもう少し大きな植木鉢への植え替え。その間には、親の転勤で、気候も言葉も食べ物も違う場所に引越すこともあるかもしれせん。これも植え替え。

さらに中学・高校と植え替えられて、人はたくましい根を張って成長していきます。

さあ、大人になったらどうで

しょうか。

最近では転職専門の会社情報誌があつたり、企業のリストラで転職を余儀なくされたりというのも植え替えです。ただし、これは根を痛めてしまう植え替えかもしれない。また、結婚や出産、離婚なんていう植え替えもあります。永久就職なんて言つて、安住の地に根を生やしたり、母は強しで母としての根をたくましく張っていきます。

苗が植え替えられるように、若いときには何回もあつた植え替えが、次第に間隔をあけるようになり、子育てが終わつたときだったり、もっと間隔があくと定年の時だったりとなつてしまします。するとどうでしょう、すでに根はガチガチに固まった根詰まり状態。地位や名誉や財産、経験や実績や知識などの根が絡み合つて、養分や水分を吸収したりできなくなつていきます。



か。「と質問をいたしました。それに対して、趙州和尚がお答えになったのが、「放下

これを植え替えるとなると大変です。根気よく根をほぐして、ほぐしたら根を切り詰めなければなりません。なにしろ何年も植え替えをしていないのですから・・・。

## ■放下著

ほうげじやく

中国唐の時代、ごんようそんじや嚴陽尊者という、尊者というのですから、かなり修行が進んだ人だったのでしよう、じようしゆう趙州和尚に、「私になにもかも捨て去って一物も持っておりませんが、そんなときはどうしたらいいでしょう

著」。著は命令を表しますから、捨て去ってしまえと、何も持っていないという嚴陽尊者に言いました。嚴陽尊者は、さらに食いが下がって、「捨て去ってしまえと言われても、何も持っていないのだから捨てるものはありませんが・・・。」と反論します。すると今度は趙州和尚が、「そんなことを言うんだつたら、担いでいけばいいじゃないか。」と。その言葉を聞いて、嚴陽尊者は、はっと気づかれた、つまりお悟りを開かれたのだそうです。

修行の進んだ嚴陽尊者が何も持っていないというのは、むさぼりのころだとか、他人のせいにしてしまうころだとか、愚痴のころだとかは、もう一切ありません。気持ちのいい春爛漫のような心になりましたという意味だと思ふのです。もうそれで十分なのに、この上どうしましようかと趙州和尚に質問をされたのは、自分のお悟りを認

めてもらいたいという気持ちがあるように思えます。それに対して趙州和尚が、さらに捨て去ってしまえと言うのです。自分が春爛漫のような心になったんだという自負にとらわれているのを見抜いた趙州和尚が、じゃあその自負を背負っていればいいじゃないかと捨て台詞のように言いました。そこでようやく嚴陽尊者は、自分が何も持っていないということにとらわれていたな、と気づいたのでした。

サツキのように、土を落とす状態で、もう何もくっついていない状態のところ、さらに「放下著」と言われるのですから、あとは根を落とすしかないわけです。物事の根幹というように、根は大切なものですが、それさえも捨ててしまえと趙州和尚は言い放つのです。

そこで、思い切って地位や名誉や財産、経験や実績や知識などの根を放下するのです。その





# 四国あるき遍路の旅

## 2巡目第11回



六十番札所横峰寺への遍路道は、想定外の雪道でした。

二巡目第十一回の四国あるき遍路の旅を、二月二十二日～二十四日の二泊三日の日程で、十八名の参加者で歩いてまいりました。  
山あり谷あり、歩きあり電車あり、晴れあり風あり雪あり…と、まさに人生即遍路の言葉通りの遍路でした。  
四国遍路は同行二人と言われますが、圓福寺の同行多人の遍路の記録をご紹介します。

(参加者に配布している写真集の抜粋です。)

### 第11回のあしあと

第11回							平成25年02月22日～24日			
期日	曜日	コース予定					食事・宿泊			
1	2月22日	金	各自羽田空港到着、チェックイン	8:00発	JAL1461	9:40着	松山空港	9:55発	【歩く距離】約13.1km	
			空港連絡バス	10:23着	羽田空港	10:30発	伊予鉄高浜線	10:51着	高浜駅	11:00発
			松山市駅	11:35着	昼食	12:20発	一徒歩一	12:45着	13:05発	昼食：羽田空港で購入
			約2.0km	52番太山寺	約2.7km	53番円明寺				
			一徒歩一	13:05着	13:15発	JR予讃線	14:12着	14:15発		
			約0.4km	伊予和気駅		大西駅				
			14:35着	14:45発	一徒歩一	15:10着	15:35発	一徒歩一		
			たくま饅頭		約3.9km	54番延命寺		約3.4km	ホテル福亭	
			16:20着	16:45発	一徒歩一	17:00着			0232-22-1285	
			55番南光坊		約0.7km	ホテル福亭			今治市北宝来町1丁目5番6号	
2	2月23日	土	6:30～	7:45発	一徒歩一	8:10着	8:35発	一徒歩一	【歩く距離】約23.1km	
			ホテルにて朝食	ホテル福亭	約2.8km	56番泰山寺		約0.4km		
			一徒歩一		一徒歩一	9:15着		一徒歩一		
			龍泉寺(泰山寺裏の窟)参拝		約2.7km	伊加奈志神社、石清水八幡神社		約0.4km		
			9:30着	10:00発	一徒歩一	10:40着	11:10発	一徒歩一	昼食：團分寺手前のサークルK	
			12:55着	13:40発	一徒歩一	58番仙遊寺		約6.1km		
			57番米福寺		約2.4km					
			12:55着	13:40発	一徒歩一	法華寺(伊予国分尼寺跡)参拝		約0.6km		
			14:20着	14:39発	JR予讃線	14:55着	15:00発	一徒歩一		
			伊予桜井駅			玉之江駅		約6.0km	湯の里小町温泉「しこくや」 西条市小松町明穂甲47 TEL 0898-76-3388	
3	2月24日	日	6:30～	7:30発	一徒歩一	9:25着	9:35発	一徒歩一	【歩いた距離】約22.1km	
			宿にて朝食	宿	約8.1km	登山口休憩所		約1.6km		
			10:20着	10:50全員着	昼食	11:40発	一徒歩一	12:50着	13:20発	昼食：大頭のアファミマ
			一徒歩一	13:45着	13:55発	約6.0km	四国のみち休憩所			
			約1.3km	舗装道路に出た地点	約2.4km	61番香園寺		14:30着	15:05発	
			一徒歩一	15:20着	15:40発	一徒歩一	16:00着	16:30発		
			約1.3km	62番宝寿寺	約1.4km	63番吉祥寺				
			16:35着	17:15発	JR予讃線	17:26着	17:31発	JR予讃線		
			伊予氷見駅			壬生川駅		しおかぜ17号		
			18:25着	18:40発	一空港リムジン	18:55着	19:45発	JAL1476		
松山駅			松山空港							
21:10着										
羽田空港										
							【歩いた距離】約58.3km			



## 「大道無門」

今回最初の札所、五二番太山寺の国宝の本堂前に辿りついてお参りを終えて、境内の東屋を借りてのお昼ごはん。道中で買い求めることができないので、初日のお昼は羽田空港で買った、「ヨネスケこだわり天むす」という豪華版。その上、国宝を眺めながらという贅沢なおかず付きでした。

本堂に相對するような豪華な門は、四天王門。納経所から少し下ったところにある門は、おなじみの仁王門。ちなみにこれも国宝。門前町の風情を残す道を下って、大きな道に面しての門もあり、これは一の門だそうです。

私たちは裏山から本堂前に辿りつき、お参りを終えて下りましたから、四天王門、仁王門、一の門の順で門を



くぐりました。が、本来なら一の門、仁王門、四天王門をくぐって本堂に辿りつくわけです。一の門は、ここからが境内で、神聖な場所の入り口という



太山寺仁王門を後にする。

ような意味でしょう。ちなみに、一の門から本堂までは八〇〇m近くありますから、その境内の広さは格別です。今では舗装道路となった参道の途中に、仁王門があります。車道を邪魔するような感じを受けてしまいます。

本堂への急な石段の上に、四天王門があつて、文字通り四天王が祀られています。四天王を祀る門がお寺もなかなかお目にかかれませんが、中国のお寺では巨大な四天王像が参拝者を迎えるのは珍しくありません。

このように、太山寺には三つも門があります。禅の言葉に、「大道無門」と、仏道の入り口は門なんかなくて、開けっぴろげだというように、圓福寺には門はありません、と門がないこととの言い逃れをしておきましょう。

## 跡を残さず

円明寺へは、太山寺一の門から左に道をとれば一本道です。

近づくにつれて思い出しました。一巡目の時には、仁王門が工事中で足場の下をくぐったつけ、と。今回は工事の覆いもなく、街中に目立たずにあるお寺という雰囲気、あれっ、ここだっけ？と思っていました。

確かに工事中だったと思い、仁王門をくぐって振り返ってみました。柱にも漆喰の壁にも、修復の跡が見られません。本当に修復工事をしたのだろうか？と疑問に思いましたが、考えてみれば、これこそが復元・修復のお手本ではありませんか。往時の姿に戻すということですから、いかにも修復したぞ！というのでは職人の恥なのです。そ



円明寺境内の鐘楼門をくぐる。

こには、自己主張を旨とする芸術家と違う、職人の魂があります。携わった職人の名は、人目に触れない屋根裏にでも墨書されているにちがいありません。

こんな写真集を作りながら言うのもなんですが、とかく人は、あれをやった、これをやった、あれは俺がやった、これも俺が作ったなどと言って自分の痕跡を残したがりませんが、修復に携わった職人さんには頭が下がります。それはまるで、先祖からあずかった地球を、そのままそっくり次の世代、または何百年か先の世代にバトンタッチしているからです。



### たくま饅頭

伊予和氣駅から大西駅まで、遍路道にしておよそ30キロを電車で移動し、大西駅から歩きです。道には歩道があるのですが、旧道に入ると歩道なんてありませんから、大げさに言うと車にびくびくしながら歩



くのです。旧道に入るところで休憩をしたら、おあつらえ向きにおまんじゅう屋さんがあるではありませんか。一巡目では気づかなかった店です。

単調な舗装道路を歩いてきたところに、心がほっとするような「たくま饅頭」。饅頭といえば、ぶっくり丸いのが相場ですが、たくま饅頭は一枚二枚と数えられるような、平べったい形をしていました。

### 栄福寺への遍路道

泰山寺から栄福寺への遍路道は、蒼社川を渡っています。蒼社川の堤防にだとりつくと、川の方を指さしている

古い道しるべがあります。今では橋が架けられていて、川の水量を気にすることもありませんが、橋がなかった時代には、道しるべ通りに川を渡っていたの



でした。一巡目では、この道しるべに従って、川を渡ったのですが、残念ながら河川工事中で、今回は渡ることができませんでした。

橋を渡った右手に小高い山があり、その向こう側の山裾に五十七番栄福寺があります。小高い山の上に、二つの神社があり、おそらく八幡神社、私たちが今治市内を一望した方の神社が、廃仏毀釈前の栄福寺だろうと考えられます。そこで、古い遍路道はその小高い山を登っているに違いないと思い、あえて伊加奈志神社の急な石段を登ったのでした。社殿裏からの道は、初めて歩く人には決してわからないけど、道ですから、経験者がいないと分け入ることはできない道です。

無事、八幡神社に着くと、社殿前から今治市内、そしてうっすらとしまなみ海道の橋を望むことができました。





この景色が、栄福寺への遍路道でのおすすめのビューポイントです。廃仏毀釈前の栄福寺からの景色だと思えば、昔のお遍路さんたちと同じ景色を味わっていると思え、なにか特別な気持ちにもなります。

というのも、現在の歩き遍路道は、二つの神社がある山の裏側を回り込むようにして栄福寺に向かう道に変わってしまっているからです。おそらく、一人で歩いていたら、楽な方、早い方、近い方と考えて、この景色を見る



八幡神社から今治方面を眺めると、街並みの先に瀬戸内海、左の先にしまなみ海道の橋を見ることができます。山中を抜けての眺めだけに、絶景です。

ことはできないに違いありません。同行多人とは有り難いものだとつくづく思うのでした。

### 栄福寺のご詠歌に思う

栄福寺の歴史によれば、貞観元年（八五九年）、行教上人が、九州の宇佐八幡の分社を、京都の男山に建立するため瀬戸内海を往來中に、暴風雨に遭いこの地に漂着しました。そして府頭山（八幡神社のある山）が男山に似ている事に驚き、山頂の阿弥陀如来を本地仏として、八幡神を祀り、神仏習合の八幡宮を建立したと伝えられます。

そこで、栄福寺のご詠歌は、「この世には弓矢を守る八幡なり、来世は人を救う弥陀仏。」というように、今の世では戦いの神である八幡様のように生きなければ仕方がないが、来世には人々を救う阿弥陀様のようになろう、とのご詠歌は、まさに神仏習合であっ



栄福寺本堂前で、記念撮影。

た栄福寺にふさわしいと思われれます。現代に置き換えると、経済優先の時代だから経済の復興とか、農業も大規模化だとかいいますが、いつまでも高度成長の残像を引きずっている感を否めません。もう戦いの時代ではないのに、いつまでも刀や弓矢の力を振り回していたのでは、人心は仏さんに近づけないのと同じように、そろそろ、世を挙げて、経済だけで救われるのではない、物が豊かだけで安心するのではない時代にならないものかと思うのでした。



## 迷い犬の池

榮福寺の参道を下りて左に進むと、行く手を遮るような大きな土手が迫ってきます。犬塚池の堤です。

その池の由来によると、「かつて榮福寺と仙遊寺の住職は一人が兼務していました。一人で往復するにはとても体が持たないので、二つの寺の連絡を手伝っていた利口な犬がいました。寺の鐘の音が聞こえると犬が駆けつけ、手紙をくわえ、もう一方の寺へ向かうのでした。

ところが、ある時、二つの寺の鐘が同時になり、犬はどちらに行けばいいのかわからなくなり、右往左往しているうちに池に落ちて死んでしまいました。この犬を哀れに思った村人たちは犬



犬塚池を過ぎた山中の遍路道

塚を設け、この池をいつしか犬塚池と呼ぶようになりました。」というのです。

その由来ができた当時に、行く手を遮るような堤があったかどうか知りませんが、犬が落ちた池はあったのでしよう。

現在も、遍路道は池のほとりを通って、仙遊寺へと続いています。途中の山道は昔のままのようですので、そこは犬塚に祀られている犬も通った道だと思えます。

さて、遍路中の私たちは、次の札所に向かって、ひたすらに歩いて行きます。途中、迷いそうになっても、木の枝にぶら下がった道しるべや、石の道標に導かれて、無事目指す札所に辿りつくことができます。

日常の生活も、次の札所というようなきちんとした目標があれば迷うこともないような気がするのですが、あの人がこう言ったからとか、こっちの方が得だとか、こうした方が楽だとか、その時々にあれこれ振り回されてしまっていないでしょうか。

犬塚に祀られた犬のように、榮福寺と仙遊寺の鐘が同時になって、どっちに行ってもいいのかわらなくなって、どっちと同じではありませんか。その挙句に、池に身を落として死んでしまわないように、人生の目標はなにかを明確



人生にもこんな道しるべがあれば……

にしなければいけませんねえ。

まあ、そのために四国遍路をするような気もするのですが……。人生即遍路という言葉で考えてみれば、一日一日歩くこと、一日一日精一杯生きていくことが迷わない方法であると同時に、人生の目標なのかもしれません。

## 銀世界の札所

六〇番横峰寺へは、大頭（おおど）から湯浪（ゆなみ）までは舗装道路で、そこからのいよいよ山の中に分け入っていきます。喘ぎ喘ぎ登ってしばらく行くと、森の中に何やら白いものが目につき始めました。なんと雪です。次第に残雪の量が増えて、横峰寺の山門の前では、残雪どころではなく、雪道になってしまいました。第一

回の高野山奥の院の時も雪道でしたが、びしゃびしゃだったその時と違い、二度目の雪は全然とけていなくて、サクサク・バリバリという形容がふさわしい、本当の雪道でした。山門をくぐると銀世界です。しかも、山門からの道は雪かきも丁寧にしていないと見えて、バリバリと遍路に似合わない歩く音がしました。本堂前には、雪かきをした雪と屋根から落ちた雪とで、小山ができていて、雪の囲まれた境内は冷蔵庫の中の



雪に囲まれてお参りをする。

ようです。本堂、大師堂とお参りをしたあと、各自暖かそうな場所を探して、大頭のコンビニで買い求めたお弁当で、昼食としました。

みんながお弁当を食べている間、広渡さんが荷造りロープをいくつも切つて、靴底に巻きつけるすべり止めを作ってくれていました。昔は、ゴム長靴にわら縄というすべり止めでした。ゴアテックスやら、かかとのクッションなど、技術が進んでも、縄やロープに頼らなければいけないのに比べ、やはり草鞋は最高の履物なのかもしれせん。なにしろ、靴底全体が縄できているのですから・・・。ただし、雪道などでの保温性は皆無です。

遍路ころがしと言われる急坂を下り、子安大師で有名な六一番香園寺、そして六二番宝寿寺六三番吉祥寺までお参りして、無事帰路につききました。



遍路ころがしの入り口までの道は、アイスバーンでした。

参加者募集

約20名

第12回

2巡目

四国あるき遍路の旅

十二回は、伊予の国を終えて讃岐の国に足を踏み入れます。難所は六十五番三角寺と六十六番雲辺寺の二ヶ寺。七十番本山寺までお参りする予定です。

【日程】十一月十五日(金)～十七日(日)

【旅程】飛行機にて松山へ。電車にて六四番前神寺参拝後、再び電車で移動して六五番三角寺。麓の旅館で宿泊。二日目、六六番雲辺寺まで歩いて、観音寺市内で宿泊。三日目、観音寺市周辺の四ヶ寺を参拝して、高松空港から帰路。三日間で約五十二kmを歩く予定。

【参加費】約五、六万円を予定

【申込】お電話・メールなどで、お寺までお申込下さい。その他、何なりとお問合せください。





# 寺から半里

## ～わが町かど探索～

園生町 熊倉 浩



### その1

#### はじめに・古代の官道

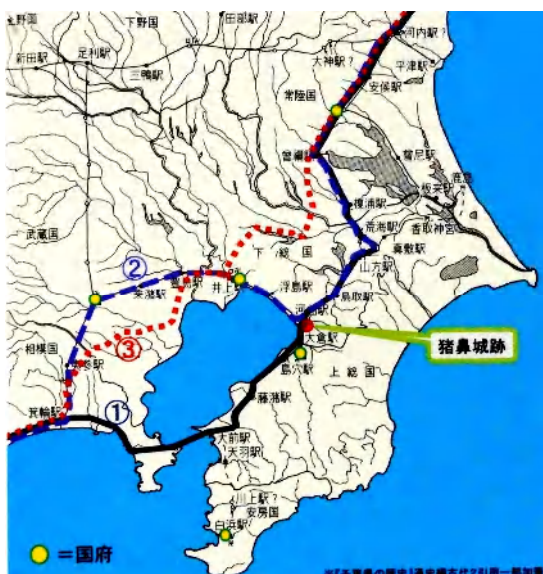
お寺の前を走る道路はもと国道十六号であった。右へ二〇〇メートルほど行くと丁字路の角に、昔、道祖神社と称した穴川神社がある。何時頃の創建か知らないが、市内三道祖神の一つが此処にあることはこの一帯が栄えていた証拠である。

神社手前の交差点には、国際千葉駅伝コース四二・一九五kmの四〇km点で、路面にマークがある。

南北に走る県道七二号（穴川天戸線）は古代の東海道に比定されている。現在の道路そのものではないが、ほぼ沿っていたと考えられる。その頃の東海道は三浦半島の馳水（走水）から海上を渡り房総半島に上陸する。上陸地は天羽とする説が有力である。

上総国府（市原）を通過して村田川を渡り下総国に入る。村田川が境川と言われる所以だ。生実からはほぼ一直線北上し市内の本町通りで今の国道一二六号に入る。そしてこの丁字路へと繋がる。古老の話ではかつて江戸道と呼んでいたというのがそれは近世のことであって、古代は下総国府（市川）に至る官道（国道）であった。この道は、東海道が陸路武蔵国を通過ようになる延暦二四年（八〇五）まで存続した。なお、明治一四年の陸軍参謀本部による迅速図では、東京街道と記されている。

下総国府からさらに東海道は常陸国府（石岡市）まで通じていた。古代の千葉には河曲駅がおかれていた。中央区新宿附近に比定されている。さら



房総を通る古代の官道と駅家・時代は①②③の順

に官道は千葉から別道として印波郡鳥取駅を通り、真敷駅（大栄町に比定）からは官道を離れ香取への道となる。都から来た役人が東国の大社香取神宮に詣るためであろうか、香取への近道であった。「香取海」を渡り板来（潮来）からは香島神（鹿島神宮）へも陸路があった。行方郡を通過して石岡の国府に入る。昔々東海道はわが町を通過していたと思うと何となく誇らしく、胸を張りたくなる。前回に続き、再び「寺から半里」を寄り道しながら歩いてみたい。今回は、県道穴川天戸線の東側に目を向けることにしよう。



一六号線に沿って・雄撃ちのこと



旧国道一六号は、お寺から左へ行くと一二六号線に当たる。この道は昭和四八年、若潮国体開催時に新たに整備されてまだ新しい。一六号線は三浦半島の端から富津岬まで大東京をぐるっと取り囲む動脈である。横浜からスポーツセンターまでは一六五kmとある。

若潮国体までは、国道とは名ばかりの、田舎の細いでこぼこ道であった。しかも曲がりくねって、今も所々痕跡がみられるが、当時全国の道路が改装されつつある時、千葉県が最も遅れていると悪評だったことを覚えている。

整備される前の一六号線の写真がなにかと数年来探し回ったところ、白井市の資料館で見つけた。展示室に掲げてあるパネルは見上げるように高く吊ってありガラスの反射が強く、更にケースの柱を避けると極端に斜めからの位置にあった。レンズを向けたが、ついに撮ることは出来ず、ここで紹介出来ないのは残念である。関心のある方はどうぞ白井市へ。



園生貝塚の森

内科病院があり、そこから右に下がったあたりに戦時中穴川神社に移転させられた石尊神社があったが、今その跡地を確認することは出来ない。左の大きな森は、縄文遺跡園生貝塚である。前回書いたのここでは割愛するが、国指定の有効候補に挙げられている著名な遺跡である。近くの穴川郵便局では、モノレールと放射線医学研究所をデザインした風景印（日付印）が使われている。前任の斎藤局長さんが着任して作られたものだが、彼は放医研でなく園生貝塚を入れたかった。斎藤さんは局の周辺地誌に関心があったので「寺から半里」のコピーをあげたところ大層喜ばれ局員に回し読みさせ、これを持って皆で出かけようと案内を頼まれたが、実現することなく定年を迎え震災直後の宮城に帰られた。幸い被災を免れた故郷では老いた母親が待っていた。局舎も移転し新しくな

穴川郵便局の風景印



り、当時の局員はだれもない。一二六号線の起点は京葉道路の橋からで、一六号線はここから京葉道路に沿って市街中

央部へと向かう。

スポーツセンターは現在天台町となっているが、もとは陸軍演習場であった。古図で見ると園生村と萩台村だったことがわかる。なるほどジョイフル本田前のバス停に「萩台入口」の名を今に留める。あやめ台と柏台が分離独立し更にスポーツセンターが天台になったことで元の園生村は奇妙な形になってしまった。

ジョイフル本田の緩やかな坂を過ぎるとワンズモールだ。昔日の面影は全くなく、驚くばかりの街になった。道路の左右は畑と森ばかりで畑の奥に点々と農家が見えた。ぎっしり立ち並んだ商店街だが、隙間から古く大きな立派な農家が今も散見される。

かねて耳にしていた古い道標はどこか。何度来ても分からなかったが、犬も歩けば何とか・・・なあんだこんな所かとみつけたのは、交差点のワンズモール側角である。明治一九年の「秩父参拝記念碑」で、文字はすでに風化して容易に読めない。昭和六三年

に、地元の人と思われる鈴木某が復元して新旧並んで建っていた。郷土愛にあふれた篤志家とみた。道標に記された「北布佐・木下道」「東馬渡」「南千葉」「西検見川」を地図上で調べたらピタリと合っていた。一〇〇年以上も経ち、元の道路はすでに無いにしても交通の要衝だったことを窺がわせる。



た。桜もそろそろという春三月のことである。二日ばかり降り続いたが明日は晴れとの予報に、雉は間違いなく出るというのだ。Tさん父子の言いなりに従う。Tさんは他界されたが、この父子はれっきとした猟友会のハンターであった。いつも愛する銃を撫でながら鉄砲自慢を聞かされては逃がした獲物の大きかったことの話に熱が入るの

この辺りだったであろうか、Tさん父子と車中で待つこと三〇分。Tさん一家とは今の地に移住以来の付き合い合いだ。明

朝七時に雉撃ちに行くから待っているようにと、土曜夜遅く連絡があった

だった。

雨上がり、春の畑面からは湯気が立ち昇っていた。出た！出た！雉のつがいながら餌をあさり始めた。ソイツと窓のガラスを降ろして銃を構えじつと待つ。日曜の早朝などは車も人も通らない一六号線であった。やがて耳を劈く車内一杯の轟音。狙ったのは雄だった。このような場合、ハンターのモラルとして雌は撃ってはならないと聞いて一つ利口になった。

その夜、父子を招いて雉鍋をかこんだ。子供達は綺麗な尾羽を手にして珍しい宝物にはしゃいでいた。何もかものおんびりとして狩猟もやかましくなかつたころである。いろいろ法的規制が施行される前、猟銃所持の許可をとれば誰でもハンターになれたブームの時期があったと聞くが、この父子は戦前からの筋金入りの鉄砲撃ちであった。

旧陸軍下志津演習場

ここ長沼原・鹿放原（六方原）から下志津ヶ原にかけては、彼らの猟場であった。京成本線の勝田台・志津・トリーケ丘駅の南一帯から四街道市・千



葉市にいたる広大な原野は、旧陸軍下志津演習場であった。敗戦によってこの土地は解放されたが、大陸からの引揚者や戦災者が集団入植するまでの暫くの間は放置されたままであった。開拓が始まってからも猟場には変わりなかった。汗水流して、原野は立派な耕地となり生産の成果を上げるまでになったが、やがて離農者が続出、今は街となり企業が進出し工業団地となり、かなりの耕地は姿をとどめていない。時代がそうさせたのだ。

下志津ヶ原は旧陸軍砲兵発祥の地でもある。ここはすでに寺から半里どころではないが、長沼原から続く歴史に残る大演習場なので、テーマから逸脱するが若干触れておきたい。

記録に残る佐倉藩の砲術演習の始まりは宝暦年間という。寛政四年には南波佐間（現四街道）で大砲の実射が行なわれている。その後、西洋式砲術が採用され、だんだん自前で火薬や大砲の製造へ進むようになる。文久元年になると、下志津村で本格的な演習「火射」がはじまった。また大砲製造所「火薬場」も造った。



時代は明治、ここは陸軍省の所轄となる。明治四年新政府はフランスから軍事顧問団を招き、その一人ルボン砲兵大尉はここに射撃場を構築し、洋式砲術の本格的な教育を日本で最初に開始した。

以後、段階的に拡張を続け、明治一九年には陸軍砲兵射撃の学校が開校され、これが日本砲兵発祥の地となった。佐倉市南志津小学校の近くに「日本砲兵揺籃の地」なる記念碑が建っている。

明治二七年、総武鉄道（JR総武本線の前身）が開通するや、明治三〇年にこの学校は陸軍野戦砲兵射撃学校と改称して四街道に移る。現在の四街道市役所前である。軍事力の拡大と近代化に伴い続々と他の諸施設や軍隊も、四街道駅の北口周辺に集中的に移設・新設され一大軍隊町となった。野戦砲兵射撃学校はのちに陸軍野戦砲兵学校と再改称される（大正一一年）。



日本陸軍砲兵の揺籃の地記念碑

大隊も設置され、これもやがては教導連隊に拡充され、近代化・機械化が進められた。野戦砲兵学校の北、今は住宅地となったが、町ずれ

に大土手山（人工の山）、別名「ルボン山」というルボン大尉の名がついた射撃の射点（的）跡がある。記念碑がたっていて戦跡として保存されている。

下志津演習場は県下のみならず、全国からくる軍隊の演習でいつも溢れていた。砲兵だけでなく歩兵や騎兵、さらに稲毛区役所の場所にあった戦車学校や戦車連隊からも演習に出かけた。戦車の掩体壕が、砲兵揺籃地記念碑の西方に今も残っている。私の兄も士官学校時代に砲を引いて、遠路ここまで演習に来たという。



ルボン山 射撃場跡

大正一一年高射砲隊が野戦砲兵学校内に新設、昭和一三年千葉に陸軍防空学校ができるとそちらに移った。現在の小仲台小学校・図書館・仲よし公園・公務員宿舎である。その他は省略するが陸軍の殆どの機関・施設・部隊が集まった。

さかのぼって明治三二年、実部隊である野戦砲兵第一八連隊が新設され、日露戦争に参加している。その跡地に続いて野戦砲兵第一連隊が広島呉より移駐する。現在は、愛国学園高校と千葉敬愛高校になっている。

大正一三年になると飛行場が作られ、陸軍下志津飛行学校が開校する。現在の若葉区若松町、陸上自衛隊下志津駐屯地（高射学校）である。

四街道はこうして発展してきた軍隊町であった。そのため、住民の多大な犠牲は免れなかった。村がいくつも廃村になり、お寺や神社、学校などは集落から遠く離れたところ



戦車の掩体壕跡



ろに移転させられた。四街道や周辺の寺社の境内に、創建時の場所からこの地に移った経緯などの碑を見つけることがあるが、以上の理由による。

下志津演習場は江戸時代から続いていることや、総武鉄道が開通したことで首都からの利用が便利なため拡張に拡張を重ね、民有地を取り上げ鹿放原まで、さらに長沼原まで伸びてきた。

『印旛郡誌』には「下志津原、六方野原は一帶の曠野にして関東一の大砲射撃場たり云々・・轟々殷々寧日な演習をなす云々・・」とある。そして田畑山林を陸軍用地に取り上げられた件へと続いている。

長沼原と云えば、わがお寺の鼻の先である。開拓団が入植して立ち上げた農業協同組合は、やがて離農者が増えその役割を終えて解散したが、あたりを歩いてみると演習場の匂いは当然ながら、開拓に払った苦勞の結晶を探すのも今日容易ではない。

軍都と云えば四街道だけでなく、千葉、習志野、市川の軍施設にも触れ、下志津演習場との関係にも触れたいが、道草せずに先へ進むとしよう。

(次号につづく)



## 第36回花園会ゴルフ大会

5月14日 於：ムルイゴルフクラブ 市原コース

【協賛】  
鷹羽石材様  
中島市郎様

第三十六回大会は参加者十四名とこじんまりした大会となりました。腕前が上がったかどうかは不明ですが、優勝の確率だけは上がった中、数字に強い雨海さんと関山さんが上位となりました。上位成績は表の通りです。

今回のチャリティは一万二千円でした。参加者が少ない分、少額になってしまいましたので、次回(十月二十二日)は、たくさんの方の参加をお待ちしています。

チャリティは、「あしなが育英会」、東日本大震災・津波遺児支援」に寄付させていただきました。

順位	お名前	グロス	ハンディ	ネット
優勝	雨海 宏明	94	20.4	73.6
準優勝	関山 秀人	89	14.4	74.6
3位	小山 稔	94	19.2	74.8
4位	矢野 弘明	91	14.4	76.6
5位	常世田 政信	96	19.2	76.8

## 平成24年度花園会会計報告

平成24年4月1日～平成25年3月31日

	科目	金額	備考
歳入	前年度繰越金	99,273	
	お寺より活動費	1,605,000	
	行事収入	1,889,920	年越し参り、地蔵盆・禅童会・土曜会・新年会・写経会・ご詠歌などの参加費を含む
	雑収入	10,121	東京教区7部からの法話会助成金及び預金決算利息
	歳入合計	¥3,604,314	
歳出	宗派賦課金	174,500	本山納付花園会費、災害見舞金ほか
	行事費	2,220,560	年越し参り・地蔵盆・禅童会・土曜会・写経会・ご詠歌ほか
	事務費	341,907	事務経費、行事案内状の印刷費、郵送料など
	会議費	274,710	月例役員会
	研修費	215,389	役員研修
	慶弔費	0	
	寄付金	236,600	角香炉 4個 及び ○福 座布団 50枚をお寺に寄贈
	雑費	0	
歳出合計	¥3,463,666		
剰余金	¥140,648	剰余金 ¥140,648は次年度繰越金としました。	

## 寺の事件簿

## 薪小屋から転落！

毎年冬になると、市原別院の雑木林の伐採をして、薪作りをします。

幼稚園の薪ストーブに使ったり、収穫祭のかまどにくべたりと、自然エネルギーの大切さを見直すことにつながればと思っています。

伐採する様子を園児た



住職手作りの薪小屋(建築廃材でできています。)

ちに見せ、自然の大切さ・いのちのありがたさを感じるきっかけになればとも思っています。同時に、チェーンソーで伐採して、かっこいいところを見せてやろうと思っっているもので、昨年は倒しすぎてしまいました。急きよ、いただいております。建築廃材を利用して、二棟目の薪小屋作りにとりかかりました。

ようやく屋根をふく段階になり、屋根に上って、万が一のこと考え、この高さから落ちたらどうすればいいかシミュレーション。この高さぐらいたら、下は土だし、ちゃ

んと着地できると想定しました。

波トタンを仮止めして、釘を打ち始めた時に携帯電話が鳴り、通話をしているうちに仮止めの釘が抜けて、トタンもろとも滑り落ち始めました。あらかじめシミュレーションしていたので、余裕をもって見事な着地が決まりました。とはいえ、右かかとに熱が広がるような痛み。さてはねんぎしたかなと、立とうとしたら右足を着くことはできませんでした。病院に行ったら右足かかとの骨折とのこと、すぐにギブス。いまだに腫れが残っており、正座と坐禅ができない状態です。

自ら現場検証をしてみると、高さ約4m。その高さ、自らの年齢のシミュレーションを忘れていたのだと痛感しました。

その後、足を引きずりつつも、屋根を葺き終え、無事薪小屋は完成の運びとなりました。



そんな折、以前、スペインのサンチャゴ巡礼街道をともに歩いた、熊谷の松巖寺さんの奥さんに誘われました。彼女も

家庭の奥さんに対して、お寺の奥さんを「寺庭婦人」というのでそうです。そう言われると、早寝早起き、道徳のお手本、働き者、非の打ちどころのない…と、まあ私とは無縁の方のイメージを持ち続け、その呼び方に違和感を持つていました。そんなわけで、本山で行われている寺庭婦人の研修会も、ずっと避けておりませんでした。

## 寺庭婦人研修会に行く！ の巻



尚美さんのお寺ライフ

「尚美さん」？ だれであろう、住職の妻であります。  
と、始まったのが平成十一年の第二十七号でした。そして、前回ご登場いただいたのが、第三十二号。久しぶりのご登場は、ひとえに編集者の責任で、尚美さんは日々お寺ライフを送っていますが、今回は三十号ぶりにペンを持ってもらいました。

同じような思いでいたと知り、少し気を楽にして、六月二十日二十一日と、一泊二日の研修に行ってまいりました。参加者は七十名、二十代からウン十代、関東から九州までのお寺の奥さんが集まりました。

研修は、講演・講義・禅の食事作法による夕食と朝食・天井はっとうの雲龍図が有名な法堂での朝課と坐禅・・・と、内容の濃いものでした。

「おかげさま」の講演は、圓福寺に何回かおいでになった、静岡地持院の鮎川博道さんでした。おめでたい事に？、鮎川さんは五月末に、本山の花園会本部長に就任なさったばかりで、

妙心寺の石畳。(尚美さんとは関係ありません。)

少々緊張気味のように見えましたが、わかりやすく、お人柄が暖かく伝わってくるような講演でした。

私たちは生まれてから、単に生きているのではなく、大昔からの生命の営みがずっと続き、その網の目のようなつながりが途切れることなく、現在の自分の生に至っています。それは目には見えないが、まぎれもない真理であり、自分は生かされているのだということ。その目に見えないところにある真理、その目に見えない陰のような真理に対して、「おかげさま」と感謝するというお話でした。

とかく、自分の思いや感情を優先し、結果に心を奪われがちですが、その自分が存在してい







る根本のところを忘れてはならない・・・と。

次の講義は、「寺庭の在り方」というものでした。私には難しい言葉がたくさん出てきましたが、よく分かったのは、住職の使命は、布教教化・寺院の護持・後継者育成の三点で、その住職を補佐し、共に努めていくことが寺庭の本分であるということでした。

圓福寺のことを振り返ってみると、住職は日々、圓福寺・市原別院・幼稚園と多忙に過ごしています。また、弟子を育てたり、後継者も育ちつつあります。その生き方過ごし方は、住

職としての使命を、一生懸命に真面目に誠意をもって果たそうと思っています。

また、圓福寺は年間を通し、お寺と花園会の行事がとても多くあり、ほかのお寺さんの比ではありません。これも、住職の布教教化への取り組み方を表しています。

それに対して、私はどれだけ共に努めただろうかと、自分を顧みる講義となりました。

一日目の夜、参加した寺庭婦人たちが車座になり、それぞれのお寺のお話をする時間がありました。さまざまな寺庭さんがいらっしやいました。お寺に嫁いだものの、何十年も外に働きに出ていて、退職を機にお寺のことをやろうという方、ヤンキーのような姿で研修に来られていた方などなど。寺庭さんがさまざまであるのと同じように、お寺も大きさや規模が違っていたり、土地柄や取り巻く環境もさ



まざまだと感じました。その中で、寺庭さんは自分なりの役割を自覚して、熱心に生活していらっしやるように感じました。

今回、本山の寺庭婦人研修会に参加したことで、圓福寺について少し距離を置いて考えてみる事ができたような気がいたします。そして、改めて、住職を

補佐しながら、お寺の護持に努めるといふのが、私という寺庭婦人の任務かなと思いました。なお、本山の寺庭婦人研修会は、今回が開講スクーリング。東京教区での研修会を経て、いくつかのレポート提出があり、来年、再び本山での修了スクーリングをもって修了となる予定です。



じゆつ

## 十育つ

(2月の「園だより」から)

今年度も、最後の月になってしまいました。この一年、子どもたちはどんな体験をしたのでしょうか。

年長さんは、太陽の活動を通して、その明るさ・あたたかさを知り、日時計を作ってお日様から時間がわかることも知りました。卒園にあたっての制作も、なにやらお日様にかかわることらしく、今から楽しみです。

お茶のおけいこでは、お茶の苦さや甘さを感じることはもちろん、主客となって、相手を思いやることの大切さと感謝されることの喜びも味わいました。卒園式での居ずまいを見れば、場をわかまえることもお茶のおけいこで身につけたのだと気付くことができ、感動させられます。



忍者をテーマにした年中さんの活動も楽しいもので



した。忍者になるという目的に向かって、いろいろな術を身につけてきました。今月には「免許皆伝」となることでしょうか。

それ以外の各学年のたくさんの方の体験も枚挙にいとまがありません。手前みそながら、ネイチャーランドの活動も・・・。

私事ながら、忍者ならぬお坊さんの修行時代に「一を聞いて十を知れ。」とよく言われました。もちろん、十を知ることができなかったからです。そんな自分と比べて、子どもたちの姿を見ると、誰もが「一を聞いて十を知る」ように、「一つやっつて、十育つ」ているではありませんか。お日様の活動も忍者の活動を見ても、自明のことです。だからこそ、子どもの可能性は無限大と言われるのでしよう。

そんな子どもたちの姿の一端を見て「うちの子天才かも…」なんて、親なら一度ぐらいほくそ笑んだのではないのでしょうか。

その天才という子どもたちの才能を

間違って使っていないでしょうか？漢字だって、英単語だって、早期教育という甘美な言葉に酔わされて教えたら、いくらでも覚えるはずですよ。テレビゲームや携帯ゲームだって、パパより上手になるかもしれません、なにしろ天才なのですから。

でも、漢字や英単語をそらんじたり、バーチャルの世界で英雄になったとしても、それによって、あたりまえのことをありがたいと思ったり、人に感謝したり、工夫したり、挑戦してみたりなどの育ちがあるのでしょうか。

考えることのない知識の鵜呑みや、バーチャルな疑似体験では、「一つやっつて十育つ」子どもたちの才能を伸ばすことは不可能に近いと思います。

人としての基礎を身につける時期の子どもたちには、なににより体験が不可欠であることを忘れもたうことは困るのです。実体験こそが、天才といわれる子どもたちの才能を伸ばす起爆剤で、「一つやっつて、十育つ」のです。







子どもたちのお盆

# 地藏盆のご案内



8月24日(土)

午後5時	供養受付(本堂にて)
5時半	水子・ペット・人形供養
6時	御霊送り
8時	模擬店閉店・地藏盆終了



お申込下さい。

\*供養料

水子	一霊位	三千円
ペット	一霊	千円
人形	一体	千円

\*供養料は当日の受け付けです。

## ご供養のご案内

地藏盆では、水子供養とペットの供養、人形の供養とお焚き上げをしております。供養をなさりたい方は、添付の申込書を送って下さるか、お電話にてお申込下さい。

山岡鉄舟母堂のお地藏さんにちなんで毎年開催されている「地藏盆」も今年で第二十一回。  
参道の両側に「禅重会」に参加した子どもたちが作った灯籠が飾られ境内のわらべ地藏たちにお灯明があげて、本堂では、水子供養・ペット・人形の供養。そのお灯明を頂いての「みたま送り」、幼稚園児の盆踊りとなります。

織 暑 御 恩 舞

**お品書き**

手作り焼きそば、  
 炭火やきとり、山  
 形産玉こんにゃ  
 ク、昔なつかしの  
 駄菓子 かき氷 冷  
 たいまビール、  
 ジュース、こころ  
 じずかに野点の一  
 服、その他